

P北斗の拳 ジャギver

シベリアピーナッツ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

北斗神拳の伝承候補者であったジャギ…

その才能を師リュウケンは何処から見いだ

したのか…

この作品はちよつぴりテイストの違うジャギの

有り得たかも知れない未来をお届けします。

目次

漢の誓い	4
リュウケンの出会い 北斗神拳伝承者	1

リュウケンの出会い 北斗神拳伝承者

「赤子の泣き声・・・近いな・・・」リュウケンは燃える町の中、一人歩く。

見つけたのは小さな赤子と焼け崩れた家、男女の死体・・・リュウケンは赤子を抱く。

「よく生き延びたものだ・・・これも何かの縁・・・お前の名はジャギ・・・今日から私の家族だ。」

・・・数年後・・・

俺は捨てられた子なんかじゃねえ、俺には親父がいる・・・なのに町の奴らは俺のことを捨て子だなんだのほざきやがる、確かに親父とは何一つ似てねえがきにならねえしな。

しかも、いきなり二人の子供連れて来ては「ジャギよ・・・本日よりの二人はお前の兄となる」なんて言いやがる。そして白髪の方には北斗神拳とかいうよくわからん暗殺拳を伝承するなんて言い出すしよお。町じゃ負けなしの俺がそんなことを許す訳もなく、すぐに殴り込んでやったぜ。

「ふん・・・雑魚が・・・」完膚なきまで負けたぜえ・・・両方にな！俺は強くなるぜえ、あいつらに負けなくらい鍛えて、最強の男になる！最強の男とは・・・そう・・・このジャギ様なんだからなあ!!初めは基礎を徹底的に鍛えつつ、親父が白髪の・・・ラオウ?とかいうやつに言っただ木に指を打つ鍛錬をやるかあ。だがあんなクソ野郎の近くにはいたくねえ・・・ちいとばかり旅に出るしかねえなあ。

旅の途中、バイクに轢かれそうになった犬っころを助けてやったらよお、バンドナしたアンナって女とその兄貴に気に入られたみてえでそこで世話してもらえたぜ。

6ヶ月くらい基礎と指打ち続けてそろそろ様子を見に行くかあと思った俺は帰ることにたぜえ。帰って見ると弟の方も指打ちしててよ、そろそろ次のステップに進みてえと思った俺は、親父の下で修業を続けることに決めたぜえ。

また何カ月かすると、親父が子供を連れてきてよお、そいつも暗殺

拳の候補にするみてえで、俺の弟にするって言うんだ。暗殺拳になんて興味ねえ、俺は初めて弟ができた嬉しさで舞い上がっちゃったぜえ、あいつらのことは兄だと認めていねえがなあ！

親父が南斗聖拳って奴らに会いに行くって出てった日によお、ナント力拳のシバって奴が道場破りに来たみてえだが、日頃の成果が出たみてえで候補者でもねえ、俺に負けやがったぜ。

「師父！お待ちしていました早く道場へ！」

「こっ・・・これは・・・ジャギよ・・・往くというのだな・・・明日の生死さえわからぬこの修羅の道を・・・」とか親父が言いやがるからんな道進むかあ！俺は俺の道を行くぜえ・・・目指すは最強の漢だあ！！って言ってやったぜ。

～～～4年後～～～

俺以外の伝承者3人はよお、秘孔つつうよくわかんねえのを突くためにいろいろやってるみたいだぜ。まあ、3人だと一人余るんで弟のケンシロウの面倒は俺が見てる。

ケンシロウは才能があるみてえでずっと前から鍛えてなきや負けたかもしれないぜえ。

滝で修業してると5年ぶりにアンナにあっただんで、夜抜け出してアンナの家に行くと妙なマスクした変な奴らがコソコソしてたんでポコボコにしてやったぜ。

親父が北斗羅漢撃ちゅう技を教えてくれた、別に暗殺拳なんざ興味はねえが盗める技術は盗んでおかねえとなあ！幸い、俺には模倣の才能があるらしい、これからはどんな技もコピーしてやるぜえ・・・

次の日、またアンナのやつてる店に行くと、昨日のマスク集団に誘拐されたみてえでそっこうで敵のアジトに向かってぶっ潰してやったわ。そしたらアンナの奴、俺にほれたみてえで俺としてもアンナは可愛いと思ってたから付き合った。朝帰りになつて親父に怒られるなど思い道場の前に行くと、いきなり「ジャギさんお願いです！ケンシロウを助けて下さい!!」なんてユリアつつう幼女が大声で叫ぶもんだからこっちとしても可愛い弟であるケンシロウの危機は見過ごせねえんですぐ道場の中に向かうとケンシロウが大の大人と闘ってい

やがるじゃねえか！俺はすぐに乱入してケンシロウの前に立つ、兄として弟を守るのは当然の役割なんだぜえ。

「兄さん・・・！」「ふむ・・・君の名は？」俺は目の前の男に言い放つ。

『俺はあ！ケンシロウの兄にして！！最強の漢を目指す、ジャギ様だあ！！』

横で額に赤い点つけた金髪のおっさんが「この神聖な交流試合に水を差すとは！このクソガキがあ！！」とかいうが気にせず目の男を睨みつける。正直、力量差がありすぎて勝ち目はねえ・・・どうにかやり過ぎしてえところだが・・・

「ケンシロウ・・・良き兄を持ったな、俺はこの兄弟に光を見た！」

「シユウよ掟は掟だぞ！」

「もちろん、ただで命をくれとは言わぬ。」

「代わりにオレの光をくれてやる」なんと問答しながら、シユウとかいう、目の前の男が、自分で両目を引き裂きやがった、なんて野郎だ：俺には絶対にまねできねえぜ・・・

漢の誓い

アンナが好きな花が生い茂る場所で星を見ながら、それぞれの夢を叶えようと話し終わった後、アンナの兄貴が「兄弟！オレの妹を大事にしてやってくれよ！な！」なんて言うからアンナが死ぬまでは、大事にしてやるぜえ、死なせねえがなあ！って言ってやったら、満足したのか黙りやがった。

〃〃5年後〃〃

この5年間いろいろなことがあった、アンナとの関係も上手くいつてるし、ラオウの剛の拳やトキの柔の拳、南斗聖拳の奴らのところにも修業にいつて、様々な奥義や技を覚えさせてもらったぜえ。この5年で最強の漢への道がグツと前に進んだ気がするし、ケンシロウもユリアって南斗の女とよろしくやってる。あの兄擬き二人と比べたら大分充実した生活だったぜえ！

「ジャギ！そんなところでボーっとして何してんの？」

『今までのことを思い出してたんだよ、いろいろあったからなあ。』
「へえ、ジャギが思い出に浸るなんて珍しいこともあるもんだね！」

『そりや、たまにはあるだろうよお』

そんな他愛ない会話を続けてつとトキの野郎が慌てた様子でこつちに走って来やがった。

「ジャギ！お前も早く!!道場の中に!!」

『おいおい、どうしたってんだよ』あのクソ大人しいトキの野郎がこんな慌てたところ見たことねえ。こりやなんかあるなあ？と思った俺は従うのは癪だがアンナを連れて中に入った。その後ケンシロウがユリアを連れて入ってきたかと思えば、爆音が鳴り響き、地は裂け、大きな衝撃が俺たちを襲った。

そう。1999年 世界は核の炎に包まれた!!

中に居なかったトキの野郎は核のせいか、髪の色が変わってやがるし、ラオウの奴は親父と決別して拳王と名乗りながらどっかいっちゃまった。いつの間にかどいつもこいつもいなくなっけいきやがるし、北斗神拳の真の伝承者となったがまだまだ甘ちゃんなケンシロウと

ユリアのバカップルペアにアンナ共々ついていくことに決めただぜえ。
「兄さん・・俺はこの荒廃した地でユリアと静かに暮らせる場所を探
す。」

『ああ、いいんじゃないか？だが、ご近所さんは必要だよなあ？俺たちもお前らについていくことにするぜえ！』

「もお、ジャギつたらケンシロウが心配なだけな癖にそんな照れ隠し
し言わない！」

「すまない・・兄さんがいれば心強い。ユリアも兄がこの旅に同行して
大丈夫か？」

「ええ、ケンシロウのお兄さんですもの、それに女一人より二人の方が
楽しいわ。」

「これからよろしくね！ユリアさん！ケンシロウ！」

〜数か月後〜

それからいい感じのところを見つけて生活してつと、なんとケンシ
ロウが家の前で胸に七つの傷を付けててたおれてんじゃないか！

『おい！大丈夫かケンシロウ!!』

「うう・・・に・兄さん・ユリアは？」

『ユリアはみてねえぞ！それよりお前の治療が先だケンシロウ!!』

トキの野郎の秘孔の突き方を長年見てきた俺は医療用の秘孔を突
ける為、なんとか一命をとりとめたケンシロウに詳しく話を聞くと、
南斗弧鷲拳のシンにやられてユリアを連れ去られたという。しかも
シンは「ユリア・一人では不安だろう、その女！私たちに着いて
こい！」といい、アンナまで連れ去ったというではないか。

そこでこの俺、ジャギ様の鎖が何本かぶっ飛んだ気がする。今なら
闘神になれるかもしれないぜえ・・

『シンの野郎、南斗に行つたときは、あれほど可愛いがってやったの
に・・死をもって償わせるしかねえなあ？なあケンシロウ』

「兄さん・・俺はこの悲しみをもってシンを叩き潰す!!」

『漢の誓いだあ!!ケンシロウ、俺たちはシンぶっ飛ばして愛を取り戻
す!!』

「ああ・・往こう！兄さん!!」

ケンシロウも殺る気十分みてえだし、愛を取り戻す旅をはじめようかあ！

シンの野郎を驚かすために、派手に胸元の空いたジャケットつと、口元まで隠れるヘルメット、更にはそこら辺で見つけたシヨットガンをもって俺は身を隠す。シンの野郎、誰に手え出したかよくわからせねえとなあ？